

P-11

### 腹部大動脈瘤手術における 腸管血流量測定の見直し

(外科学第二)

矢野 浩巳      高江 久仁  
小櫃 由樹生    平山 哲三  
石川 幹夫      石丸 新

【目的】腹部大動脈瘤手術後の重要な合併症として、腸管虚血が挙げられる。発症率は10%以下であるが、一旦発症すれば重篤であり、致命的となり得る。この原因として、下腸間膜動脈の結紮が挙げられる。血管外科領域では、同動脈の温存、結紮の可否につき議論の多いところである。Ernstらは、下腸間膜動脈(IMA)の断端圧を測定し、その絶対値及び体血圧との比率により、同動脈処理の指標としている。今回我々は、レーザードプラー組織血流量計を用いてS状結腸の血流量を測定し、その有用性を検討したので報告する。

【対象】腹部大動脈手術を施行した15例を対象とした。性別は全例男性で、年齢は63~80歳、平均69歳であった。全例待機手術で非破裂性であった。

【方法】従来の方法として、大動脈遮断前後におけるIMA断端圧を測定し、その変化をみた。同様に、遮断前後にレーザードプラーを用いて腸管血流量を測定し、その変化をみた。尚、方法は、ドプラーのプローブをS状結腸しよう膜面に密着させて測定した。

【結果】遮断前IMA断端圧は、 $67.4 \pm 16.6$  mmHg、体血圧比は、 $0.77 \pm 0.08$ 。遮断後IMA断端圧は、 $59.3 \pm 19.7$  mmHg、体血圧比は、 $0.68 \pm 0.17$ であった。遮断後に56%の減少をみた1例に、術後虚血によると思われるイレウスを起こした。腸管血流量は、遮断前 $11.2 \pm 3.2$  ml/100g/min、遮断後は $9.8 \pm 4.0$  ml/100g/minであった。上記のイレウス症例では、遮断後に63%の減少を認め、15例中最も減少率が高かった。

【考察】レーザードプラーによる術中腸管血流量測定は、絶対値にややばらつきはあるものの、その変化率が著しく低下する症例にて、術後イレウスを起こした。すなわち、手術時の侵襲による血流変化を鋭敏に反映する検査法として、簡便かつ有用であると思われた。

P-12

### 下肢閉塞性動脈硬化症にみられた頸動脈病変

東京医科大学老年病学教室

○榎本陸郎 岩本俊彦 岡田豊博  
木内章裕 久保秀樹 高崎優  
東京医科大学外科学第二講座  
石丸新 石川幹夫 平山哲三

目的：下肢閉塞性動脈硬化症(ASO)に合併する脳血管障害の頻度は高い。今回下肢及び頸部における動脈硬化の関連を知り、合併症を予測するために、臨床的にASOと診断された高齢者の頸動脈病変を超音波断層法を用いて検討した。

方法：Ankle Pressure Index(API)0.9未満を示し、ASOと診断された49例(ASO群)を対象として、超音波断層法(7.5MHz)を用いて、頭蓋外頸動脈病変(plaqueの有無及びその性状よりplaqueを2種類に分類：管壁に沿い、エコー上softな隆起性病変であるmural plaqueと管壁より突出しhardな病変であるnodular plaque)を検討した。対照にはAPI1.0以上を示した脳血栓症49例(脳血栓群)を用いた。結果：1)臨床的事項：ASO群(括弧内は脳血栓群)の平均年齢は $77.3 \pm 8.5$ 歳( $75.5 \pm 6.8$ 歳)、男34例(33例)であった。基礎疾患として、高血圧は65%(61%)に、糖尿病は27%(22%)に、高脂血症は18%(20%)にみられた。ASO群の20例下肢虚血症状に対して、何らかの外科的治療がすでに施行されていた。2)頭部CT所見：梗塞巣はASO群で77%(ラクナ77%、皮質/境界域梗塞33%)に見られ、血栓群ではラクナ47%、皮質/境界域梗塞43%の他、脳幹梗塞が見られた。3)超音波断層所見：ASO群ではplaque(-)のもの、nodular plaqueのみ、みられたものが各々14%、12%にすぎず、一方mural plaqueは69%と高率に見られた。脳血栓群では正常43%、nodular plaque33%で、mural plaqueは20%と少なく、ASO群との間に有意差を認めた。閉塞例は両群とも4%であった。

下肢と頸動脈における動脈硬化度との関連が強く、ASO例では頭蓋外頸動脈病変、特にmural plaqueを検出する超音波断層法は有用と考えられた。